

吉田拓郎がひっくり返った 森進一の迫力!

昭和歌謡 誕生物語

第一曲目
文・山川智



森進一の「襟裳岬」とともに、歌謡が設置された森進一の「襟裳岬」(左)。

「歌は世につれ、世は歌につれ」とよく言われた。歌は世相を表わし、世相も歌の流行に影響される、というところが、シニアは、演歌に時代の色を感じた世代でもある。すでに亡き美空ひばり、春日八郎、三波春夫、三橋美智也……現役である北島三郎、森進一はか多々、みな一世を風靡した歌手だ。思い出深い歌、今でもカラオケで歌う歌、そんな演歌はどのようにして誕生して来たのか。新連載「昭和歌謡 誕生物語」は、そうした心に吹り込んだ歌の、知られざる物語を紹介していく。

作曲家で世界的なチエリ

ストとして知られる溝口肇さんは、かつて、あなたにとって作曲とは? という問いに「雑巾を絞る……最後の、水の一滴まで、絞り尽くすような作業」と断じた。だが、最後の一滴を搾り出し、カラカラになった雑巾をもう一度絞りなおすことで生まれた作品は少なくない。岡本おさみ作詞、吉田拓郎作曲で森進一が歌った「襟裳岬」も、そんな一曲だった。

昭和49年(1974)、ピクチャーは創立50周年とピクチャー音楽産業1周年を記念し、ある企画を進行。それは森を始め橋幸夫や青江三奈といったベテラン歌手に、演歌とは違ったエッセンスの曲を歌わせることで新境地を開く、という試みだった。

「森進一の曲を吉田拓郎に曲を書かせたい!」23歳の新人ディレクターが手を上げた。彼は71年に「走れコータ

ロー」を大ヒットさせた、ソルティーシユガー」の元メンバー、高橋隆氏。さっそく高橋氏を中心にしたプロジェクトが結成された。

だが、拓郎が最後の一滴を搾り出して作ってきた「襟裳岬」は、スローテンポでフォーク色が強く、どうしても納得できない。そこで、イントロに象徴的なトランペットを入れるなど、拓郎の楽曲に大胆に手を入れた。それは、原曲が持つイメージを完全にぶち壊したといっても過言ではないものだった。

アレンジされた曲を聴き、拓郎は驚嘆した。が、それは自分の曲が壊されたからではなかった。森の歌声によって生まれ変わった「襟裳岬」の迫力に圧倒されたからだ。拓郎は改めて森進一という歌手の持つ歌心に脱帽したという。

この曲で森は、同年の日本レコード大賞と日本歌謡大賞をダブル受賞。NHK紅白歌合戦のトリも務めた。

襟裳岬は北海道の背骨・日高山脈の終端部、年間を通して強風が吹きつける風の岬と



して知られている。作詞した岡本は襟裳岬を旅した際、地元漁師とのやりとりをヒントに綴ったものだが、この歌が流行り始めたころ、「えりもの春は何もない春です」というフレーズをめぐり、襟裳岬の住民から、ピクチャーには抗議が寄せられたという逸話もある。

ともあれ、この一曲がきっかけとなり、歌謡曲や演歌歌手にフォーク系シンガーが曲を提供するケースが増え、「襟裳岬」は、その後の歌謡界に多大な影響を及ぼすことになった。歴史的な名曲になったのであった。

Yoshikawa Chi

1962年東京生まれ、テレビ制作会社、海外誌記者を経てフリーランスに。著書に「東方神起の謎」「東方神起」「ビューティフル・ワイルド」「イースト・プレス」(「ビューティフル」は「イースト・プレス」の別冊)、「イースト・プレス」(「イースト・プレス」の別冊)など。